ASLE-Japan／文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

May 20, 2014, No. 36

【役員名簿（2012-2014）】（五十音順）

代　表：管　啓次郎（明治大学）
副代表：結城　正美（金沢大学）
顧　問：上遠　恵子（レイチェル・カーソン日本協会）
　　西村　頼男（阪南大学名誉教授）
事務局長：高橋　綾子（長岡技術科学大学）
事務局補佐：
　　辻　　和彦（近畿大学）
　　山本　洋平（明治大学）
会　計：相原　優子（武蔵野美術大学）
　　林　　直生（滋賀大学）
監　事：上岡　克己（高知大学）
ニューズレター編集委員：
　　浅井　千晶（千里金蘭大学）
　　巴山　岳人（和歌山大学・非）
　　村上　清敏（金沢大学）
会誌編集委員：
　　小谷　一明（新潟県立大学）
　　木下　　卓（愛媛大学名誉教授）
　　黒崎真由美（湘北短期大学）
　　波戸岡景太（明治大学）
　　John Rippey（滋賀県立大学）
コンピューターセンター：
　　岩政　伸治（白百合女子大学）
　　北国　伸隆（萩光塩学院）
　　山城　　新（琉球大学）
評議員：Bruce Allen（清泉女子大学）
　　池田　志郎（熊本大学）
　　石幡　直樹（東北大学）
　　太田　雅孝（大東文化大学）
　　茅野　佳子（明星大学・非）
　　塩田　　弘（広島修道大学）
　　高橋　龍夫（専修大学）
　　高橋　　勤（九州大学）
　　高橋　昌子（三重大学）
　　巽　　孝之（慶応義塾大学）
　　豊里　真弓（札幌大学）
　　中川　僚子（聖心女子大学）
　　平塚　博子（日本大学）
　　横田　由理（大東文化大学・非）
　　吉田　美津（松山大学）
院生代表：山田　悠介（立教大学・院）
広　報：大野　美砂（東京海洋大学）
　　喜納　育江（琉球大学）
　　河野　千絵（日本大学・非）
研究助成：岡島　成行（大妻女子大学）
　　乳井　昌史（早稲田大学）
　　野田　研一（立教大学）
　　山里　勝己（名桜大学）
　　管　啓次郎（代表）
　　結城　正美（副代表）

見えない森、土地の名

代表　管　啓次郎（明治大学）

４月、16年ぶりにシアトルに住みはじめた。大学院生だった昔とおなじく大学、それも特定的には図書館を中心としたエリアで日々を過ごすだけだが、見るものすべてがなつかしく、この季節には風景のあらゆるものが美しく見える。高緯度地方の春には恐ろしいほどの勢いがある。一日ごとに夜明けが早くなり、日没が遅くなる、その変化の度合いが激しい。植物も、くもり空や雨に隠されがちな陽光を、それが遮るものなく地表に届くときには思いきり吸収して、太陽エネルギーのすべてを自分の成長のために使っているようだ。まるで発熱しているのではないかと思えるほど、芽吹き、育ち、ぐんぐん大きくなり、開花する。「地球上の唯一の生産者は植物」とは、おりにふれて学生たちにくりかえし語ってきたことだが、そういいながら自分でもその意味がほんとうにわかっているわけではなかった。それがこうして水と光を確実にみずからの体へと具現化してゆく植物たちに囲まれ、手をふれるとき、疑いの余地のない真実だと思えてくる。

アパート近くの歩道で、おもしろいものを見かけた。直径12センチほどの鉄製の円盤が路面に埋め込まれている。何かと思ったら、それにはこう書かれているのだ。

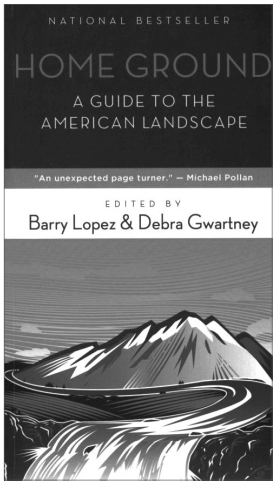
BURIED CAPSULE
CONTAINS INDIGENOUS SEEDS

あっ、と思った。この一帯が商業区域へと造成されたとき、たぶん多くの樹木が伐採され、草木の多くが舗装道路に置き換えられてしまったことだろう。われわれが日ごろ目にする都市の植生は大部分が人間の手による劇的改変を受けたものだが、もちろんあらゆる土地、あらゆる地点には、土地の元来の植物たちが住んでいたはず。その地点の陽光、降水量、地下水脈、土壌の成分などに反応して棲み分けを作ってきた、さまざまな種類の植物たちだ。その原生種のいくつかを選んで、こうして種子のタイムカプセルを埋める。はかない約束、実効性のないかりそめの象徴的行為のように思う人もいるかもしれない。しかしこれは「いつかこの土地をかれらに返すときが来るかもしれない」というヒトの気持ちを表すものであり、それにはかなり重要な意味があるだろうと、ぼくは考えている。円盤ごとに異なる種は、たとえば以下のとおり。

RED CEDER / THUJA PLICATA
THIMBLEBERRY / RUBUS PARVIFLORUS
TWINFLOWER / LINNAEA BOREALIS

英語名と学名が、並べられているのもおもしろい。そこから遠くない遊歩道沿いの谷間ではKINCAID RAVINE RESTORATION PROJECT が進行していた。いかにも行き当たりばったりに道路を作り住宅を造成してきた過去数十年の後、その展開にぽつんと取り残された一角の追いつめられた小川を、はげまし、繁茂する外来植物を除去し、もともとの姿を少しでも回復しようとする試みだろう。実際、これまでは「環境保全」という言葉で語られてきた運動の多くが、単なる維持を超えて生態系復元への積極的な歩みをはじめているのは、興味深い事実だ。ご近所レベルで行なわれるこうした小さなプロジェクトから、オリンピック半島エルワ川での、ダム除去による自然河川再建のような巨大な計画まで、規模はさまざま。いずれにせよ人間社会が過去一世紀ほどのあいだにずたずたに破壊してきた生態系を、土地の元来の住民である動植物たちに返していこうとする試みだ。めざされているのは、人間社会の自己収縮。たしかにそれは緊急に必要な態度だと思う。(それにしても自然水系や自然の海岸線の大規模な破壊をいまも飽くことなくつづける日本列島は、いったいこれからどうなってしまうのだろう。同時に思うのだが、第二次大戦後の日本における恐ろしいほどの自然破壊には、唖然とするほど愚かな地名放棄の姿勢も関与しているのではないか。)

シアトルはまた図書流通のあり方を一変させたアマゾンの拠点都市でもあるが、大学のブックストアはまだまだいい本を一定数そろえていて、２時間ほど見ていても飽きない。自然関係の棚で目について手に取ったのが Barry Lopez and Debra Gwartney, eds., *Home Ground: A Guide to the American Landscape* (Trinity University Press, 2006). アメリカの自然景観を構成するさまざまな要素を、それぞれを語るために使われてきた用語によってまとめ、事典形式でエントリーごとの解説を加えた本だ。最初にぱらりと開いて読んだのが Groveという項目。偶然の出会いだが、ここで次の一文に不意をつかれた。"... a grove is often the last remaining patch of a once immense forest." 読み過ごせばなんでもない。しかしわずかに立ち止まって考えてみるなら、Groveがつく多くの地名は、そのまま森林破壊の記憶をとどめるものではないのか、という点に思い至る。



ヒトの祖先はかつて森で暮らしたのかもしれないし、そこから草原へと進出したのかもしれない。だが少なくとも農耕の開始以後のヒトのライフ・スタイルにとって、森はしばしば手に負えない苛酷で危険な空間か、資源として開拓し、あるいは別のかたちに転換して使用すればそれでいい広がりだと見えた。それでヒトは森を切り拓き、切り崩した。広大な居住空間が手に入り、森の小さな一部分だけがそこに残った。それはあくまでも「手頃で快適な」森の切れはしであり、かつてあった恐ろしい森の記憶をごくうっすらと留めるものだった。それに聖性が委託されることがあったとしたら、それも理解できる。なぜならそれは土地の古い層をうかがわせるものであり、またヒトみずからが破壊した巨大な森に対する償いの気持ちを表せる対象だからだ。

そんなふうに連想をさまよわせながら、さらにいくつかのエントリーを拾い読みした。この本は宝石だ。全ページに発見がみちている。編者のひとりバリー・ロペスは、改めていうまでもなく現代ネイチャー・ライティングの最重要作家のひとりだが、アメリカの地名に埋め込まれた、土地の様相をそのままに告げる用語のいくつかをめぐって、彼が書いた序にこんな一文があった。「そしてロンドとは（オレゴン州グランデ・ロンド)、ヤズーとは（ミシシッピ州ヤズー)、ベガとは（ネバダ州ラス・ヴェガス)、いったい何だったのか？」これに即答できる人は、まずいないだろう。答えを記そうか。ロンドとはプレイリーに由来する黒い豊かなローム土壌のことで、しばしば円形に生じる。それでフランス語の「円い」から、この呼び名が作られた(プレイリー自体、南仏方言でいう「草原」から)。ヤズーとはミシシッピ川の支流のひとつであるヤズー川の名が一般化したもので、合流するまでかなりの距離を本流と並行して流れる川をさす（ヤズーという名称自体は現在のミシシッピ州中央部にかつて住んだ先住民部族から)。ベガとはスペイン語の単語で「草原」「湿原」「低地」など意味にかなりの幅をもつ(あのギャンブルの都ラス・ヴェガスは乾燥地帯にありおそらく「平坦な低地」とでもいった意味でそう呼ばれたのだろうが、ニューメキシコ州ラス・ヴェガス近くにはたしかにみごとな草原が広がる)。

そう、地名はこうして人々による土地の発見の記憶を伝えているのだった。アメリカの場合、数々の先住民言語、その直訳、スペイン人やフランス人やオランダ人による探検と居住の試み、アイルランドやイタリアをはじめとする移民たちの生活史、こうしたすべてがアメリカ英語の圧倒的なスペクトラムに吸収され、名前となって、現実の土地への、後につづく者たちのための、手がかりを提供してくれるのだった。

これまで知らなかったのが悔やまれるような快著だけれど、出会いには時があり、どんな出会いも遅すぎるということはない。今年はこの本を熟読するつもり。北アメリカ大陸の途方もない広大さに接近するための、最高の案内書となってくれそうだ。

【開催のお知らせ】
International Symposium on Literature and Environment in East Asia (ISLE-EA)

東アジア環境文学国際シンポジウム

（2014年11月22日［土］～23日［日］＠名桜大学［沖縄県名護市］）

結城　正美（金沢大学）

本年の全国大会は11月に沖縄県の名桜大学で開催予定ですが、それと合わせてASLE-Jも参画しているISLE-EAの国際シンポジウムも同会場で行われます。東アジア各国の環境文学研究に触れられる貴重な機会ですので、ぜひ全国大会（11月24日［月］）と共に三日間を通じて参加されてはいかがでしょうか。実行委員の結城正美さんよりご寄稿頂きました。

ASLE-Japan、ASLE-Korea、ASLE-Taiwanが持ち回りで開催している国際シンポジウムの第四回目（ASLE-Japan主催）が、11月22日、23日の二日間、沖縄県名護市で開催される予定です。金沢大会（2007年）、ソウル大会（2010年）、台北大会（2012年）に続く今シンポジウムには、東アジア以外の研究者からも関心が寄せられており、多彩な参加者が期待されます。

今回ISLE-EA（アイル・イーエー）と名付けた東アジアの合同国際シンポジウム、7年前の初回は「ASLE日韓合同シンポジウム」という名称でした。構想の背景や経緯は『文学と環境』第10号（2007年）に掲載されている「ASLE日韓合同シンポジウムまでの道のり」と「速報レポート」でご覧いただけます。ごく簡単に言えば、ASLE-JapanとASLE-Koreaは地理的に近いのにほとんど交流がなかったため、東アジアのエコクリティシズムをめぐって継続的に議論する場として合同シンポジウムが構想された次第です。金沢大会ではASLE-Koreaから20名が参加、ソウル大会ではASLE-Japanからの20名に加え、創設されたばかりのASLE-Taiwanから数名が参加し、それ以降シンポジウムの持ち回り開催を三団体で行うことになりました。今回、ASLEという言葉を大会名称から外した背景には、ASLEのない中国からの参加も歓迎するという意図があります。

今回のシンポジウムのテーマ “Unsettling Boundaries: Nature, Technology, Art” は、これまでの国際シンポジウムでの反省を踏まえて設定されています。ASLEの合同シンポジウムに限らず東アジアで文学・環境をテーマとする学術会議が開かれると、必ずといってよいほど、西洋／東洋の対立図式とそれにもとづく西洋批判と東洋賞賛を耳にします。西洋的世界観が自然の〈支配・征服〉を進めたのに対し東洋的価値観は自然との〈調和・共生〉を重んじてきたというような見解が、東洋に出自をもつ研究者（その多くが欧米文学専攻）の口から語られることが少なくないわけですが、他方で、西洋／東洋といった概念区分にはもっと慎重であるべきだという声もあがっていました。人、物、技術が加速度的に移動する現在、西洋／東洋をはじめ、自然／文化、野生／人工、ローカル／グローバルなど、従来対照的・対立的にとらえられていた概念の区別は確実に曖昧になっています。旧来の二項対立的概念図式に依存した議論を続ける限り東アジアのエコクリティシズムの深化は望めないという認識のもと、概念的境界の流動、攪乱、変化、再定義を視野に入れた議論を促したいと願い、「境界を攪乱する」ことをISLE-EAの包括的なテーマとしました。

（名桜大学の半円形劇場の舞台からみた観客席とその背後に広がる芝生広場と講義棟）

さて、会場の名護市は、エメラルドグリーンの海を臨む風光明媚なロケーションを誇る一方、基地問題で最も注目されている場所でもあり、また沖縄の生態系や東アジア諸国との交流を考える上でも重要な土地です。生物多様性、エコツーリズム、環境正義などエコクリティシズムの主要なテーマと深く関わる場所で本シンポジウムを開催することの意味が明確に感じられるようなプログラムを鋭意作成中です。なお、ISLE-EA実行委員会では去る２月に現地視察をおこない、シンポジウム会場の名桜大学や宿泊候補地のホテルゆがふいんおきなわを訪問しました。ちょうどプロ野球のキャンプシーズンで、ホテルゆがふいんおきなわは

一球団の寄宿舎として施設の大半が貸切状態でした。ISLE-EAが開催される11月下旬もキャンプと重なる可能性があるとのことですが、その場合でも部屋と食堂（オーシャンビューのすばらしい食堂です）を確保していただけるそうです。名護市街から名桜大学までは車で約10分。丘の上のキャンパスは見晴らしがよく、建物と広場がほどよいバランスで配置され開放的です。研究発表と講演の会場となる建物群の間には芝生の広場があり、室内での議論で煮詰まったらここで一休みできます。さらに、この広場の一角にあるプチ半円形劇場がすばらしく、ひと目見た時から、ここで詩の朗読会や音楽会ができたら！と惚れ込んでしまいました。なお、会場視察に際して名桜大学の小川寿美子教授に大変お世話になりました。記して謝意を表します。

最後に、今年はASLE-Japan設立20周年です。人間でいえば成人を迎える一つの節目にあたります。そのことも含めて、名護でのISLE-EAを充実したシンポジウムにするために、皆様のご参加をお待ちしています。

【ASLE-J-Grad Journal（院生組織だより）】

「不忍池図」と鉢植え

猪俣佳瑞美（法政大学・院）

人は何故、植木鉢に植栽し身近に置くのか。この問いに対する答えを人文科学の視座から探すため、絵画や映画に現れる「鉢植え」の含意を分析している。その中のひとつ「不忍池図」は、杉田玄白著『解体新書』（1774年刊）の挿図を担当したことでも知られる小田野直武（1749-1780）の作品で、1770年代、油画ではなく日本の伝統的な画材を使用し描かれた洋画であることから、蘭画あるいは洋風画と位置づけられている。

この作品について今橋理子は、芍薬の鉢植えは「不忍池図」において官能性を醸す装置で「女」を表す芍薬と、現実世界における不忍池畔の猥褻性が相俟って「不忍池図」は風景画の相貌を示しつつも、実は美人画でもある、と分析している。仲町啓子は、画題として「鉢植え」が選ばれた背景には江戸時代における中国文化、とりわけ文人趣味への興味関心があることを示唆、橋本治は、二つの鉢を覗き込む角度が異なるため、画中には二つの視点があることを指摘すると同時に、鉢植えがなぜ、わざわざ池畔に置かれているのか、という点を疑問視している。

（小田野直武「不忍池図」秋田県立近代美術館蔵）

「不忍池図」に関する資料は少なく、小田野が鉢植えを描いた真意は未だ明らかになっていない。そこで、鉢植えが内包する含意を明らかにするため、小田野による1770年代の別作品「岩に牡丹図」との比較を行った。花鳥画とは、それぞれ別の絵画的要素をもつものの合成から成立し（三輪 36）、東洋の花鳥画の世界において牡丹や芍薬は「吉祥」を、岩は「永久」「永遠」を意味する素材である（今橋 174）。「岩に牡丹図」と「不忍池図」は共に縁起のよいモチーフを前景に、風景を遠景に選んだ作品で、大きく異なっている要素は植物が生えている場所、「岩に牡丹図」では岩から、「不忍池図」では植木鉢の中の土から、という点である。岩は自然物であるため、水辺にあることに対する違和感は低い。一方で「鉢植え」は本来、池畔にあるものではないため、誰かが不忍池畔まで運んできた、という人の気配が伴い、行為の意図、理由を考えさせる。なぜなら「植木鉢」という状態そのものが、人の手の介在を強く意識させるためだ。従って「不忍池図」における「鉢植え」は、鑑賞者の想像力を喚起し、そこに至るまでの物語性に思いを巡らせる装置として機能している、と言えるだろう。

●引用文献

橋本治「ひらがな日本美術史（99）遠いもの：小田野直武不忍池図」『芸術新潮』第54巻９号、新潮社、2003年。

今橋理子『秋田蘭画の近代：小田野直武「不忍池図」を読む』東京大学出版会、2009年。

三輪英夫「小田野直武と秋田蘭画」『日本の美術』第327号、至文社、1993年。

仲町啓子「日本近世美術における文人趣味の研究：小田野直武筆「不忍池図」と盆花図の流行」『実践女子大学美學美術史學』第14号、19-42頁、実践女子大学、1999年。

【イベント報告】

第４回環境思想シンポジウム

（2014年３月18日［火］@安藤百福記念 自然体験活動指導者センター［長野県小諸市］）

河野　千絵（日本大学・非）

浅間連峰を一望する小諸市郊外の高台に、「安藤百福記念 自然体験活動指導者センター（通称安藤百福センター）」がある。ここは自然体験活動に関わる指導者養成のための施設であり、その事業の一環として、４年前から毎年春に環境思想シンポジウムが開催されている。今年も去る３月18日に、遠方また近隣から多くの参加者が集まり、活発な意見交換が行われた。

午前中には、講演がふたつ。まず、名桜大学の山里勝己氏が「ゲーリー・スナイダーの環境思想―日本との関連で」という論題で、スナイダーの思想や作品を軸に、西洋文明の価値観によって進められた近代化の意味を多角的に論じ、「場所学」という思想の方法を紹介された。ヨーロッパからアメリカに人々の移住が進むにつれて、「場所」を獲得する人々と「場所」から切断され、漂流してゆく人々が出た構図は、現在の福島や戦後のアメリカによる沖縄占領の事実にも見られる。歴史を持った「場所」の発見と、「再定住（住み直し）」によって自らの存在に意味を創造しようとするスナイダーの試みは、人間と自然・場所・土地との関係を考え直すという意味で、我々にも必要なことではないかという山里氏の指摘は、参加者達の共感を大いに呼んでいた。

次の登壇者は上智大学の北條勝貴氏で、論題は「＜串刺し＞考―＜残酷さ＞の歴史的構築過程」。北條氏は「＜残酷さ＞の尺度とは、古代を克服するために近代が創出した、歴史的構築物に過ぎない」という説のもと、「串刺し」という行為を例に、『出雲国風土記』や『日本霊異記』『沙石集』などの文献を引用しつつ論を展開された。もともとは供犠に結びついた、生命への賛辞の形でもあった「串刺し」の意味が、仏教教義の影響などにより変質・限定されてゆき、極めて残酷な行為として人々の意識に定着するに至った経緯が鮮やかに説かれ、非常に新鮮であった。異文化理解の際に求められる複眼的な世界観や柔軟な倫理基盤についても言及がなされ、また、山里氏のスナイダー論に関連して食物連鎖の話題（生き物は殺生の連鎖の中から逃れられない、という指摘）も挙がり、活発な論議が交わされた。

午後からは、金沢大学の結城正美氏と大阪府立大学の福永真弓氏による研究報告が行われた。昨年、食と文学がテーマの研究書『他火のほうへ』を上梓した結城氏は、汚染と食についての関心に端を発した文学研究の成果について述べられた。主な対象作品は石牟礼道子の『苦海浄土』。「水俣病わかめといえど春の味覚」という言葉が示すように、食物が汚染されていると知りつつ食べる人がいる。それはなぜだろうか。他に選択肢が無い、検知できない、美味なので自制できない等の理由の他に、あえて抵抗として食べるのでは、という考え方もできる。いずれにせよ、科学的な判断に基づいたリスク思考とは異なる世界観がそこにはある。「食べ物は天からの授かりもの」なので、危ないからといって切り捨てることのできない世界観。「天から」与えられたものを食べるという感覚は、（たとえ胎児に異常がある可能性が考えられても）授かった子を産む、授かるかぎりは産み続ける、という生命観にも通じている、という結城氏の指摘で、食べることと生きることの関係は単純ではなく、自らの内的世界の土台に関わるものだと気づかされた。

結城氏が提示した食に関する問題意識には普遍性があり、フロアからは「その土地のものを食べることで土地そのものと一体化してゆく感覚」や「外道に堕ちた獣を食べてその往生を助けるという、仏教における免罪符的な考え方」などが紹介され、刺激的な議論展開となった。続いて福永氏は、フィールドワークに基づくアメリカ先住民の人々に関する報告をされた。先住民たちは「意図的に再配置をされてきた」こと、そして非先住民の人々はその事実を無視してもやってゆける状況にあること。「この土地じゃないと、土地が俺を見つけてくれない」という先住民の詩のような叫びは、山里氏が提唱されている「場所学」を考える上でも、大きな意味を持つと思われる。

春まだ浅い信州で、豊かな時間を過ごさせて頂いた。

【エッセイ】

二つの伝記

上遠　恵子（レイチェル・カーソン日本協会）

1970年代からレイチェル・カーソンの著書・伝記の翻訳を数多く手がけてこられ、レイチェル・カーソン日本協会会長である上遠恵子氏が、二つの伝記を通してカーソンへの熱い思いを語ってくださいました。

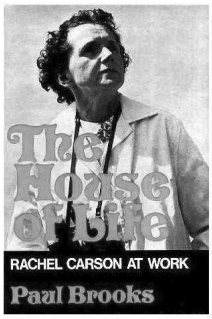
2014年４月13日、「レイチェル・カーソン没後50年記念のつどい」が京都で開催された。第一部は『沈黙の春を生きて』というドキュメント映画の上映、第二部は映画の監督の坂田雅子さんを交えてのディスカッションだった。この映画は、ベトナム戦争中にアメリカ軍の枯葉作戦によって大量に撒かれた枯葉剤（2－4－5－Tなどの除草剤でダイオキシンを含む）の影響で、戦後40年を経たいまでも、身体障害、知的障害をもつ子どもが生まれていることを伝えている。その人たちを、アメリカのベトナム帰還兵を父に持ち、彼女自身片足が無く手の指も欠損しているアメリカ人女性が訪ねる旅の記録でもある。レイチェル・カーソンが『沈黙の春』のなかで警告した化学物質の負の循環の恐ろしさに私たちは言葉を失った。機会があれば是非皆さんに観て頂きたい映画だ。あまりにも衝撃的な映画であったので紹介してしまったが、本題とは直接的には関係はない。

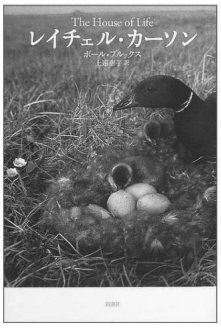
私は、レイチェル・カーソンの生涯を追い、その思いを語り継ぐことを自らのライフワークとして来たので、彼女の伝記を読む機会が多く、いくつか翻訳させていただいた。一番始めは、Paul Brooks, *The House of Life: Rachel Carson at Work*（1973）で、1974年に『生命の棲家』と題して新潮社から出版した。二冊目は、Linda Lear, *Rachel Carson: Witness for Nature*（1997）で、『レイチェル――レイチェル・カーソン「沈黙の春」の生涯』と題して、2002年に東京書籍から出版した。いずれも題名は出版社が決めてくれた。

『生命の棲家』は、題名からはレイチェル・カーソンの伝記だとは分からないので、その後、『レイチェル・カーソン』と改題された。『沈黙の春』も1964年に出版された時は『生と死の妙薬』という妙な題名だったが、やがて『沈黙の春』と改題されている。私の手許にある『生と死の妙薬』の訳者解説の文末に、訳者の青樹簗一氏が“書名は出版社が自由に付したものである”と述べておられるのは、訳者としてはご不満だったのかなと想像している。

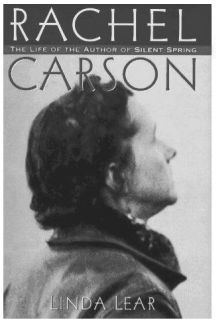
ところで、ポール・ブルックスは、『沈黙の春』を執筆しているカーソンを編集者として励まし支えていた、いわば戦友だった。文章は暖かく、登場人物はほとんど顔見知りで臨場感があり、本全体に友情が溢れている感じがした。リンダ・リアにとってカーソンは、生まれ故郷が近い尊敬すべき先輩なのだが面識もなく、伝記の素材だった。レイチェルを知る200人もの人を取材し、当時の社会状況や私生活を含め詳細に描いている。私は訳しながら、“ねえレイチェル！こんなこと書かれてもいいの？”と何度も呟かなければならなかった。読者にとっては興味深いことかもしれないし、私自身カーソンのことを書くときには百科事典のようにページをめくることもあるのだが、なんとなく後ろめたい思いを隠せない。

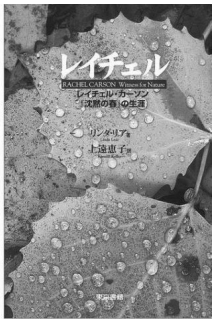
私は、二人の作者にお会いしているが、ポール・ブルックス氏は穏やかな老紳士で、彼が1980年に著したアメリカのネイチャーライターの系譜と言える *Speaking for Nature*（『自然保護の夜明け』新思索社）の翻訳を始めたことを伝えると、大変喜んでくれたことを思い出す。しかし、完成報告をする前に亡くなってしまわれた。





リンダ・リア女史は、ジョージワシントン大学の環境史の教授で, 精力的で自信に溢れた女性だった。カーソンの次は、ピーターラビットのビアトリクス・ポターを書くと張り切っていた。(既刊、邦訳はランダムハウス講談社)　別れ際に、“頑張れよ！”というようにポンポンと私の肩をたたいてくれた。





ASLE-J会員が、いつの日か誰かの伝記を執筆することになったとしたら、どちらのタイプになるだろうか。

【シリーズエッセイ　シネマ×環境（3）】

サム・ホッゾ『ブルー・ゴールド　狙われた水の真実』

塚田　幸光（関西学院大学）

ヒトは体内に＜海＞を持つ。海から陸に上がったヒトは、外皮を覆う＜海＞を内に取り込む。水袋としてのヒト。そう、この感覚は、砂漠の灼熱を前にすると、確信に変わるかもしれない。藤原新也が述べるように、灼熱はヒトに、薄皮一枚が隔てる＜内なる水／海＞を意識させるからだ。

サム・ホッゾ『ブルー・ゴールド』（*Blue Gold: World Water Wars,* 2008）は、水戦争の世紀を予見し、水の政治学を看破する。石油（ブラック・ゴールド）から水（ブルー・ゴールド）へ。生命の根幹に関わる＜水＞は、我々が思っているほど多くない。海水と淡水の総計は、約14億立方キロメートル（海水は97.5％、淡水2.5％）。淡水2.5％には、氷河が含まれ、実際に使える水は0.8％程度で、安全な水は0.001％！

68億の人々が、0.001％の水を奪い合っているわけだ。ならば、争いが起こらないわけがない。

「ライバル（rival）」の語源が「リバー（river）」であるように、水をめぐる国家の争いは、メソポタミアなどの古代文明を見れば明らかだろう。だが、現代の水戦争は古代文明よりもタチが悪い。大企業が国家や国際機構を支配し、途上国の主権を根こそぎにするからだ。「水と持続可能な開発に関するダブリン宣言」（1992）が好例だろう。ここで、水は「商品」と定義される。「共有財産」ではなく「商品」。水ビジネスの開始は、サッチャー／レーガンの置き土産として、払拭不可能な禍根となる。以後、世界銀行が水ビジネスを主導し、途上国の水の民営化が加速する。スエズ（仏）、ヴェオリア（仏）、RWE（独）の３大水メジャーは、次々と水利権を獲得。ブエノスアイレス（スエズ）、サンディエゴ（ヴェオリア）等々。先進国は世銀に出資し、世銀は世界水会議の方針に従い（水会議の役員は水メジャー）、途上国の水事業の民営化を促す。途上国の命の水を利権に変え、民営化の名のもとで、水メジャーが収益を上げる。これはまるで、先進国と水メジャーによる貧困ビジネスではないか（『007 慰めの報酬』（*007 Quantum of Solace,* 2008）の悪役が、水メジャーだったことを思い出そう。2008年公開！）。世銀という仮面の下には、コンプライアンスなどお構いなしの大企業の顔がある。

『ブルー・ゴールド』と『フロウ　水が大企業に独占される』（*Flow for Love of Water,* 2008）がターゲットとしたのが、ボリビアであることは興味深い。世銀の貸与で命を繋ぐボリビアは、先進国の経済植民地である。1990年末、世銀はボリビア政府に対し、コチャバンバの水道事業の民営化を強制する。世銀の開発援助の条件が、水道の民営化なのだ。背に腹は代えられないボリビア政府は、要請を受諾。水事業は米国ベクテル社に売却される。結果、水道代が収入の25％にも跳ね上がる（コチャバンバの月額収入は60ドル！）。怒りの収まらない住民は、大規模な抗議行動を展開し、一触即発の状況へと発展。最終的に、政府は住民の主張を受け入れ、ベクテルは撤退する。この事件は、新自由主義経済モデルに対する初の拒絶行動である一方、世銀は支援停止で圧力をかけ、途上国をけん制したのだ。ならば、世銀や国家は、誰のために存在するのか。

（図１）

（図２）

ボリビアは『ブルー・ゴールド』と『フロウ』の結節点であり、これらドキュメンタリーの主眼は、新自由主義経済に対する拒絶の意思表示である。水資源を収奪する「ハゲタカ」を糾弾し、市民の運動を賛美する。映画はボリビアの抵抗をペットボトルの拒絶へと繋げ、環境保護へ導く。実際、ボトル飲料の25％は水道水、コストは水道水の100倍、環境を破壊し、収益は水メジャー。だからこそ、ボトルの水を捨て、環境を守ろう、と（図１）。当然、その主張に異議はない。だが、水クライシスを煽り、デモのショットをフラッシュバックさせる編集はプロパガンダと大差ない。少なくともここに客観性はないからだ。

砂漠と水のペットボトル（図２）。これは『ブルー・ゴールド』のイメージであり、ペットボトル／ヒト／地球の危うさのイメージでもある。我々がこの映画から学ぶことは多い。だが、政治的アクションを促す映像は、負のリアクションを内包し、熟慮とは遠い。何故今、＜水＞なのか、そしてその背後には何があり、何をすべきなのか。公正な眼差しこそが、ドキュメンタリーには不可欠だろう。

事務局より

■2014年度ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会例会・役員会のご案内

これまで５月に開催しておりました役員会を下記の通り、例会と併せて開催することとなりましたのでお知らせいたします。例会には多くの会員の方々のご参加をお待ちしております。

●日時　2014年６月８日(日)　10:00－15:30
●日程
10:00～12:00　役員会
12:50～14:40　映画『ある精肉店のはなし』上映
～15:30　ディスカッション(纐纈あや監督出演)
●場所
明治大学和泉キャンパス
(〒168-8555　東京都杉並区永福1-9-1)
明治大学和泉図書館ホール
●参加費
上映代にあてるため会員にはお一人1000円のカンパをお願いいたします。

【2014年東アジア環境文学国際シンポジウム】

と　き：2014年11月22日(土)～23日(日)
ところ：名桜大学
(〒905-8585　沖縄県名護市字為又1220-1)

【2014年度ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会】

と　き：2014年11月24日（月）
ところ：名桜大学
(〒905-8585　沖縄県名護市字為又1220-1)
大会実行委員：山城　新（琉球大学）
＊発表プログラム・懇親会等詳細については、会員メーリングリストやASLE-Japanウェブサイトにてお知らせします。

＜会費納入のお願い＞

例年通り、５月末発行のNewsletter 発送に合わせて振込用紙を同封しております。年会費(一般5,000円、学生2,000円）の納入をお願いいたします。

口座番号　01300-0-93821
加入者名　文学環境学会
(フリガナ：ブンガクカンキョウガッカイ)

＜会員情報の訂正・更新について＞

会員の皆様にお願いして参りましたが、連絡先住所、電話番号、メールアドレスに変更がありましたら、すみやかに事務局補佐・辻（twain1910@gmail.com）までご連絡ください。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

広報より

広報担当では、会員の皆様からお寄せいただいたご活躍の情報をウェブページに掲載しております。アドレスは以下のとおりです。

http://www.asle-japan.org/publications/会員による出版物/

今後も定期的に情報の更新をしてまいりますので、皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の大野美砂（misa@kaiyodai.ac.jp）までお送り下さい。次回の更新は2014年11月ごろを予定いたしておりますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。これまでに情報をお寄せいただいている先生方は、新しい情報のみをご連絡ください。これまで情報をお寄せいただかなかった方々からのご連絡もお待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。

ASLE-J　広報委員　喜納育江
大野美砂　河野千絵

編集後記

ニューズレター 36号をお届けします。今号も、管代表の巻頭言に始まり、結城副代表の東アジア環境文学国際シンポジウムの予告、猪俣さんによる院生組織だより、河野さんの第４回環境思想シンポジウム報告、上遠顧問によるエッセイ「二つの伝記」、塚田さんの連載シネマ×環境の第三弾等々、盛りだくさんの内容となりました。編集作業を通して、環境にまつわる言説がかくも多様で、恒常と変容の間をたゆとい、そして今なお豊穣であることに今更ながら驚いています。

次号は11月に開催される東アジア環境文学国際シンポジウムとASLE-Japan誕生20周年を祝う全国大会の報告記事が中心となる予定です。名護市のエメラルドグリーンの海を臨みながら、会員の皆様と美酒をともにできる日を楽しみに。

（K・M）

【発　行】
代表　　管啓次郎
事務局　長岡技術科学大学　高橋綾子
〒940-2188
新潟県長岡市上富岡町1603－1
Tel/Fax: 0258-47-9805（直通）
E-mail: tayako@vos.nagaokaut.ac.jp

【編　集】
編集代表　金沢大学国際学類　村上清敏
〒920-1192
石川県金沢市角間町
Tel：076-264-5827（直通）
E-mail: melville@staff.kanazawa-u.ac.jp